



若手ドクター の広場 ①



女性のアルコール依存症患者さんとのかかわりについて About relations with female alcohol dependence syndrome patients

阪和いずみ病院 角田 三穂子 *Mihoko Sumida*

はじめに

当院は大阪府南西部泉州地区に位置する病院で、主に同地区や大阪中心部の患者さんを、60床あるアルコール依存症専門病棟で治療している。患者さんの半数以上は女性であり、女性エリアには、下は10代、上は80代までのさまざまな年代の女性が共同生活を送っている。例会や男女別ミーティング、講話、SMARPPのグループワークなどに加え、アルコール作業療法の時間には、カードゲームARASHI（三重県立こころの医療センター 長徹二先生らが開発）や依存症かるたなど遊びの要素を入れたもの、未来の自分に宛てた手紙を作成するプログラムなども導入している。本稿では、多くの女性患者さんが集う当病棟の様子を紹介したい。

依存症女性の共同生活

女性エリアは男女混合の依存症病棟とは雰囲気異なる、いくなれば女子校のような空間である。24時間寝食をともにし、プログラムを一緒に重ねていくので自然と親密になり、同性同士の安心感も手伝って、これまで出せなかった自分を出せるようになる患者さんもある。女性のテーマミーティングでは、じっくりテーマを掘り下げて発表するので、参加者同士が心の深い部分で共感し合い、このミーティングを大切にしているという空気が自然と醸成され、自助グループにも自分たち

で誘い合って意欲的に参加されることが多い。まさに、患者さん同士のセルフヘルプがうまく病棟内で機能しているのである。依存症治療の導入部分を担う入院加療でここまでの雰囲気を作り出せるのは、コミュニケーションが得意な女性だからこそでもあり、ちょっとした病棟でのかかわりの工夫が影響していると思われる。

共同生活から生まれる気付き

患者さん達から、「あの子はまるで娘のようだから、私が退院した後も先生よろしくね」といった、他の患者さんを思いやる言葉をよく耳にする。また、「ありのままの自分でいられて居心地がいい、退院したくない」という女性患者さんがかなり多い。ある部分では疑似家族のような関係性を病棟内で築いているのであろう。“共依存傾向があり適切な距離をとれていないのでは”という懸念もあるが、この距離感だからこそ生まれる気付きや治療的側面を尊重したい。入院している女性の大半は、親が依存症者、被虐待歴、DV被害の経験または併存する精神疾患などがあり、さまざまな人間関係の問題を抱えながら生きている。そのため、他人との境界線がないことでお互いに振り回されたり、情緒的に不安定になったり、喧嘩したり、孤立したりとさまざまな問題が起こる。そういった問題に丁寧に介入していくことで、その方自身の問題点や生きづらさがみえて